

今日の説教のポイント <使徒言行録 17 章 16～34 節>

①アテネという町とその住民 — 現代の私たちとよく似ている？

いよいよギリシアのアテネにきたパウロ。当時の世界で、学術・文化・芸術の最先端を行く町アテネ。「エピクロス派やストア派の幾人かの哲学者もパウロと討論した」(18)と、今の歴史や倫理の教科書にも載っている名前が出て来ます。しかしルカは、パウロの話を書いたがった彼らについて、「すべてのアテネ人やそこに在留する外国人は、何か新しいことを話したり聞いたりすることだけで、時を過ごしていたのである」(21)、と厳しい見方をしています。最先端を行っていると云えばカッコ良く聞こえますが、自分の関心を満足させるだけの人生は、たとえ一時満足できても、空しいものです。その空しさを埋めるために、さらに次から次へと新しいことを求め続けているのは、現代人も同じではないでしょうか？

②パウロがここでした説教をどう考えるか？

パウロは、そんな彼らに聖書の神様のことを伝えようと、彼らも受け入れる一般的なことから話し始めたのですが、イエス・キリストの話、特に復活のことになった途端、彼らは聞くのをやめてしまったのです。それで、パウロもまた「その場を立ち去った」(33)とあります。ここを読んで思います、こうすれば人は必ず信じるようになるといった方法があるわけではなく、やはり神様が招いて下さったときに、人は御言葉に耳を傾けて信じる者となって行くのだ、と。この時も、パウロの話を書いて信じる人は起こされたのです、「彼について行って信仰に入った者も、何人かいた。その中にはアレオパゴスの議員ディオニシオ、またダマリスという婦人やその他の人々もいた」(34)。

③ただ十字架のキリストを語る。その時に、信じる人は必ず起こる！

パウロはこの後コリントで伝道しました。「もう自分の知恵によらないで、ただ十字架につけられたイエス・キリストだけを語ろう」(I コリント 2:1-5)、そう決意して臨んだら、多くの信仰者が生まれしました。イエス・キリストに盛られた新しい話。それは私たちが信じて生きるに値する大いなる恵みの話です。もしあなたがそう思うようになるなら、それは聖霊なる神様が働いて下さっているからなのです！